

第7回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<高校の部 優秀賞>

「教師—ガラス職人—になるために」

小原万美子

子どもとはガラスだ。まだ小さく、高温で熱され、今から作られようとするガラスだ。純粹で透き通っていて、溢れんばかりのエネルギーを放ち、赤々と光り輝きながら大きくなっていく。しかし、とても繊細で弱く、周囲の影響を受けると変形してしまう。一度大きく変わってしまうと元に戻らないこともある。その子どものガラスを大切にふくらし、形作るのが親であり、私の目指す教師だ。

私の夢は小学校教諭だ。軟らかいこどものガラスを、丸くて美しい形、薄くても硬い大人のガラスにしていくために、私たちはただ勉強を教えるだけではない。まだほとんど何も知らない純真無垢な彼らに、優しく、厳しく学びの息を吹き込むために、まず子どもの気持ちを理解することが一番だ。私のいとは三人が小学生、一人が四歳で、正月に祖母の家に来る時には一緒に遊んだりする。本当に無邪気で可愛く、私がいづも元気をもらう。いとこの中でもそれぞれ性格が違い、いづも元気な子もいればおとなしい子もいる。そこで明るく社交的な子の方に接してしまいがちになるので、一人一人の個性を理解し、平等に、その子に合った接し方ができるように心がけている。また、学校生活でも、授業の進め方や黒板の書き方だけでなく、教師が生徒に対して話す教訓など、自分のためになることは自分の頭に刻みこんでおく。そして、豊富な知識を含め、生徒への熱い情熱、思いやりがあるなど、私には小・中・高校でそれぞれ尊敬している教師がいる。これからも、自分の将来の見本となるような教師と出会い、多くのことを学んでいきたい。

人の気持ちを理解することや、分け隔てなく思いやりを持って行動することは、普段から出来ることである。今から出来ることを積み重ねていき、まず自分が美しい大人のガラスになりたい。そして、周囲から尊敬され、全ての子どもを美しいガラスへと育てられるような、教師—ガラス職人—になりたい。